

テゼ共同体を訪ねて

著者	佐藤 司郎
雑誌名	大学礼拝説教集
号	12
ページ	92-94
発行年	2008-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024518/

「テゼ共同体を訪ねて」

キリスト教科 佐藤 司 郎

エフエソの信徒への手紙、第五章一九節

19 霊に満たされ、詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。

今日は先月訪ねる機会のあったフランスのテゼ共同体について少し話してみたいと思います。

パリから特急列車とバスを乗り継いで三時間ぐらい南西の方角に行ったブルゴーニュ地方に、テゼという古い小さな村があります。ここにテゼ・コムノーテ（テゼ共同体）と呼ばれる、カトリックとプロテスタント出身のブラザー（兄弟）たちが祈りを中心に共同生活している場所があります。年間をつうじて、夏は一週間で五千人ももの若者が世界中から訪れるという、皆さんきくと驚くことでしょう。彼らはそこで賛美（テゼ共同体のオリジナルな歌）と聖書朗読と沈黙とからなる一日三回の礼拝に参加し、グループで聖書を学び、祈り、黙想し、交流を深めて帰って行きます。

テゼ共同体をはじめたのは、ロジェというスイス出身のプロテスタントの牧師です。彼は第二次世界大戦のさなか、争いのただ中に身をおいて和解のために祈りまた和解を生きる共同体を求めて、

彼の母の国フランスに移り、「ここにいてください。私たちは孤独なのです」という老女の願いにこたえてテゼ村に住むことを決意します。「私はテゼを選びました。その婦人が貧しかったからです」「キリストは貧しい人たちを通して語っておられます。彼らに耳を傾けることはよいことです。彼らとの交わりは信仰があいまいなもの、非現実的なものとならないように守ってください」。テゼは当時ナチ占領地域と南の非占領地域の境界近くにあつて、ナチ支配から逃れてきた難民、多くはユダヤ人でしたが、彼らをロジェはかくまいスイスなどへの亡命の手助けをします。テゼ共同体の祈りに最初に加わったのはそのようなユダヤ人など政治的難民でした。一九六〇年頃から、テゼは、多くの若者を迎えるようになります。一九八九年以降はとくに東ヨーロッパからの青年が多くなつていると聞いています。日本からの訪問者は必ずしも多くはありませんが、韓国人など、アジアから訪ねる人も多いのです。いまやまさに世界の若者の巡礼地のようなのです。

今回、もちろん礼拝にも参加しました。テゼのオリジナルの讃美歌をうたい、聖書の言葉に耳を傾けます。ここまでは、私たちのこの礼拝と変わりはありませんけれど、説教はなくて、沈黙です。黙想です。聖書の言葉を思いめぐらしながら、神を思い、自分を見つめる。厳肅な静かな礼拝です。きれいな建物はありませんし、便利なものは何もありません。テントがはってある巨大なキャンプ場のようですが、静かに自分を見つめ直し、神のこと、世界のことを考えるよい場所になっています。

テゼを支配している考え方のもっとも素晴らしい点は、神の前で自分を見つめるということと、他者に奉仕する、とくに貧しい人々に仕えるということが、分離していないということにあるように思います。自分を見つめる、むしろこれは悪くはない、しかしそれはしばしばただ自分の幸福だけに目がいつてしまうことになりがちです。そういう意味で現実からトランス〔超越〕してしまふことが起こりかねない。そうではない、神を思い、聖書を学び、自分を見つめることが、この世に向かうことへと、他のために自分が奉仕することへと結びつくということ、それが、私たちの学ばなければならないところです。私を案内してくれた人はカトリックの若いドイツ人でしたが、ここで一週間案内のボランティアをして、また帰って社会の中で働くのだと、はっきりしたドイツ語で説明してくれました。

さて今日の聖書の言葉は、テゼの礼拝を知っている人には身近に感じるでしょう。しかしそうでない人にも、新しい、豊かな響きを立ててここらに入ってくるはずです。神への思いに満たされること、それが私たちに他の人と語り合う道を開くのです。今日の聖句をもう一度に読んで祈りましょう、「詩編と賛歌と靈的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい」。

(二〇〇七年一月二日 泉キャンパス)